

第3 主体的に進路を選択する能力・態度を育成する進路指導の在り方

経営研修課 長期研修員 三浦 理恵

1 主題設定の理由

高校進学率が90%を超える時代になり、生徒、保護者は、自己の適性、個性に合った学校を選択するよりも、「入れる学校」を選択する傾向にある。こうした状況にあって、入学後高校生活に馴染めず、退学する生徒は平成14年度には89,409人にもなっているのが現状である。また、学校に対しても、合格を目的とした進路指導に偏っているという指摘がなされている。そのような中で、今、進路指導観の転換が求められ、生徒の個性や適性に合った進路指導、生き方を考える指導が必要とされている。

平成10年12月に改訂された中学校学習指導要領には、「生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択できるよう、学校の教育活動全体を通じ、計画的、組織的な進路指導を行うこと」「生徒が学校や学級での生活によりよく適応するとともに、現在及び将来の生き方を考え行動する態度や能力を育成することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、ガイダンス機能の充実を図ること」と示されている。このように、これからは、生徒自らが将来の進路や生き方を主体的に選択することが進路指導の大前提となる。

そのような中で、今、生徒には主体的に進路を選択する能力・態度が求められている。ここでいう主体的とは「自分の考えや判断によって行動する」ことである。生徒が「主体的に進路を選択する能力・態度」とは、生徒が、目標をもち、的確な自己理解に基づいてそれを達成するための計画や手順を構想する能力・態度と考える。

このような「主体的に進路を選択する能力・態度」を身に付けるには、自己理解力（注1）と意思決定力（注2）を育成する必要がある。自己理解力は、様々な体験の中で、自分を振り返ることにより、自分は何に興味・関心があるのか、長所短所は何か、得意分野は何かなど自分の特性を理解する力である。また、意思決定力は、毎日の生活の中で、様々な機会に自分の考えを明確にし、自分で判断、決定し、実践する力である。

これからの進路指導においては、生徒が主体的に進路を選択する能力・態度を身に付けられるよう様々な教育活動の中で、自己理解力、意思決定力を付けていく機会を意図的に設定し、個に応じた指導・援助をしていく必要があると考え、研究主題を設定した。

2 研究の目的

学級活動、道徳、体験活動の有機的な関連を図った進路指導計画や、個に対応した進路相談の方策を考察することを通して、主体的に進路を選択する能力・態度を育成するための進路指導の在り方を明らかにする。

3 研究の方法

- (1) 進路指導の課題を明確にするために、A中学校教師及び同校三年生とその保護者、卒業生を対象にアンケート調査を実施する。（平成15年9月実施）

(2) (1)から明らかになった課題を基に、以下の3点について構想する。

- ・自己理解力・意思決定力を育成する個人ファイルの活用方法
- ・学級活動、道徳、体験活動の有機的な関連を図った3年間を見通した進路指導計画
- ・個に対応した進路相談の在り方

4 研究の内容

主体的に進路を選択する能力・態度を育てるために、どのような手だてを講じたらよいかを、進路指導のアンケートから見いだされた課題を基に構想する。

(1) 進路指導の現状

中学校における進路指導の実態を明らかにするためにアンケート調査を行った。(資料1) その結果、進路指導の現状について以下の4点が明らかになった。

ア 進路指導の成果

生徒が学習したと答えている割合が高い上位三つの項目②④⑤は、教師が指導したと答えている割合が高いものと一致している。これは、教師が指導したことが生徒にも伝わっているからであると考えられる。つまり、現在行われている進路指導がそれなりの成果を挙げているといえる。今後も意図的に教師が指導する場を設けていくことが大事である。

イ 進路指導の課題

(7) 進路指導に対する生徒の意識

教師の回答に比べて、生徒が学習したと回答した割合が低いのは項目⑦⑧である。特に項目⑧の学習は自分と向き合う学習であり、中学生には抽象的な内容である。そのため、生徒が十分に納得するまで学習することが難しいと考えられる。

また、現在の中学生は、将来の生き方や人生設計はまだ先のことと考える傾向がある。生徒は、必要感に迫られていないため、学習したことが定着していないとも考えられる。

同じことが項目②と③の違いにも表われている。項目②を学習したと答えている生徒の割合が高いのに対して、項目③を学習したと答えている生徒の割合が低いのは、高校についての学習に比べて、職業についての学習は、将来の生き方や人生設計について深く考えていないために、必要性を感じていないためと考えられる。

【資料1】

学級活動などの時間における進路に関する学習の状況

項目	学習状況 (%)	よくしたまあまあした		あまりしなかつしなかつた	
		生徒	教師	生徒	教師
① 自分の性格や適性の理解	生徒 60 教師 89	40	11		
② 希望する高校の教育内容や特色	生徒 77 教師 94	23	6		
③ 産業や職業の種類や内容	生徒 55 教師 79	45	21		
④ 学ぶことや働くことの意義	生徒 69 教師 100	31	0		
⑤ 進路選択の考え方や方法	生徒 78 教師 95	22	5		
⑥ 進路に関する情報の入手方法と利用の仕方	生徒 62 教師 79	38	21		
⑦ 進路に関する不安や悩みの解消	生徒 36 教師 89	64	11		
⑧ 将来の生き方や人生設計	生徒 48 教師 79	52	21		
⑨ 希望する高校の合格可能性	生徒 61 教師 84	39	16		
平均	生徒 61 教師 88	39	12		

このことから、今後は先を見通すことの必要性をとらえさせることが大切であるといえる。そこで、主体的に進路を選択する能力・態度の育成につながる学習を充実させ、繰り返して指導する必要があると考える。

(イ) 進路指導が有効に機能する活動

項目②⑤は生徒がよく学習したと答えている。その理由として、これらの学習は、生徒にとって必要性の高い学習内容であること、高校調べ、高校体験入学、卒業生の体験発表など具体的な活動と結び付いていること、生徒にとって内容が理解しやすいことが考えられる。さらに、自分の進路を考え、目的をもって学習したという充実感が得られたからであると思われる。また、教師側の回答から、実際にかなり力を入れて指導がされていることがうかがわれる。

しかし、項目④は、抽象的な内容であるにもかかわらず、学習したと答えた割合が高い。また、教師の指導が十分になされていることがアンケートの結果からうかがえる。これは、道徳などを通して、そのときの指導が具体的に行われたからである。そのために、生徒が心情的な共感を伴った理解をしているものと思われる。

このことから、体験活動を伴った具体的な学習や心情的な共感を伴った学習は定着しやすいことが分かる。そこで、進路指導が更に充実していくために、学級活動、道徳、体験活動の有機的な関連を図ることが大切であるといえる。

(ウ) 進路指導に対する生徒と教師の意識の違い

生徒と教師の意識の違いが顕著に表れているのは項目⑦⑧である。特に項目⑦は、個別に対応しなくてはならない課題であり、教師の指導や援助がより個別に必要な学習である。しかし、時間が取りにくいなどの理由から個別な学習が十分に行われないのが現状である。そのため、生徒にとっては十分学習したという実感が得られないのではないかと考えられる。また、他の項目と異なり、教師は進路の不安や悩みを解消するために一般的な学習をしているが、生徒は、学習した、しないという基準ではなく、自己の悩みの解消に役立った、役立たなかったという基準でとらえていることも理由として挙げられる。そのため、教師は指導しているにもかかわらず、教師の思いほど効果が上がっていないと思われる。このことから、進路相談を通して個に対応した指導・援助をしていく必要があるといえる。

(2) 個人ファイルの活用

(1)イ(ア)で述べたように、主体的に進路を選択する能力・態度を育成するためには、個人ファイルを有効に活用して、進路についての学習を繰り返すことが大切であるといえる。

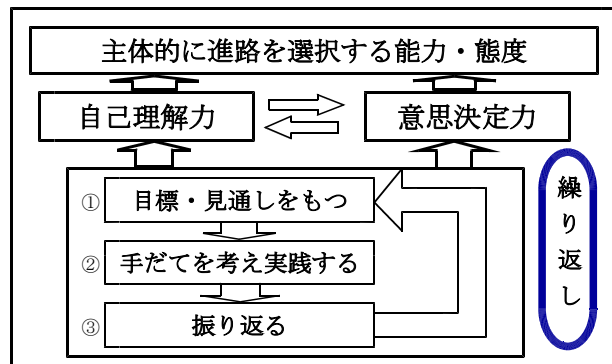
ア 主体的に進路を選択する能力・態度を育成するための過程

主体的に進路を選択する能力・態度を育てるためには、資料2に示したように、目標・見通しをもって、活動に取り組み、学習を振り返るというサイクルを繰り返すことが大切であり、その中で、自己理解力が育っていく。また、自らの見通しに基づいて主体的に判断し、行動していく中で、意思決定力もはぐくまれる。そして、自己理

解力と意思決定力は互いに作用し合い、より高められていく。

こうした活動を3年間通じて行うことにより、主体的に進路を選択する能力・態度が育成されると考える。そのためには進路にかかわる内容を有機的に関連付けて、学習を組織化することが必要である。

【資料2】主体的に進路を選択する能力・態度を育成する過程



イ 進路学習における個人ファイルの必要性

学習の過程や状況を生徒自身が振り返るためには、学級活動、道徳、体験活動などでの学習の過程や結果を蓄積する個人ファイルが必要である。それによって、自分の良い点、興味・関心、考え、適性などを理解しやすくなり、自己理解力を育成することができる。個人ファイルには、ワークシート、感想文、レポート、資料などが蓄積される。これらに教師がアドバイスやコメントを加えることにより、生徒は、新たな課題を見だし、その解決に向けて積極的に取り組むようになる。また、進路学習や進路相談で用いたワークシートを持ち帰り、保護者の意見や助言を記入してもらうことで、以後の進路学習や進路相談で活用することができる。

個人ファイルは、進路学習の内容や進路相談の記録を3年間積み重ねていくために、資料やワークシートを随時挿入できるものを使用する。また、進路学習の單元ごとに用紙の色を変えたり、ステージや内容ごとにしきりを入れたりするなどの工夫をし、振り返りがしやすいようにする。また、個人ファイルは、一定の場所に保管し、常に利用できるようにする。

以上のように進路学習に個人ファイルを利用することにより、生徒の自己理解力が育成されると考える。

ウ 保護者との共通理解を図る個人ファイルの工夫

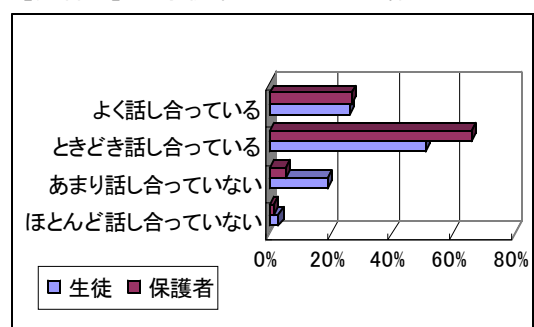
生徒が、保護者との話し合いを参考に、自分の考えを深め、課題を解決していくことを通して意思決定力を育てていくためにはファイルを工夫していくことが必要である。

「将来の生き方や進路」についての生徒と保護者の話し合いの状況は、「よく話し合っている」「ときどき話し合っている」を合わせると生徒は77%、保護者は93%である。

(資料3)

話し合いの内容は、「進路希望・実現の可能性」についての内容が多い。(資料4) また、保護者は高校選択や学習にかかわることを重視しているが、学校での出来事や将来の職業などについて話し合う機会は少ないこ

【資料3】中学校卒業後の進路の話し合い



とが分かる。

5年後、10年後の進路については、「よく話し合っている」「ときどき話し合っている」を合わせると生徒は41%、保護者は60%である。(資料5)

これは、保護者と生徒の間では、中学校卒業後の進路については話し合うことは多いが、将来の生き方については、あまり話し合われていないことを表している。このことから、生徒と保護者が進路についての意識を変革し、3年生になってから進路選択のために話し合うのではなく、日頃から生徒と将来の生き方や夢について話し合う機会を設けることが必要であるといえる。

生徒と保護者が、中学校1年生から、継続的に、将来の夢や生き方について話し合い、お互いに意見を交換し合うために、H市S中学校では、「生徒の成長の過程が積み上げられるファイリング」として通信簿の工夫を行っている。この通信簿の内容は、生徒が考えている将来の夢や夢を実現させるための方策、体験学習に対する自己評価、保護者が必要としている情報などである。家庭での話し合いの機会が少ないことなどの現状を踏まえて、S中学校で行われているように通信簿の工夫を進路指導のための個人ファイルに応用し、計画的に家庭で話し合う機会を作り出すことが必要である。

エ 保護者の子供理解を図る個人ファイルの活用

保護者の子供理解を図るために、ワークシートに「5年後、10年後の生き方について」など、将来の生き方や人生設計にかかわる内容と生徒の自己理解力、意思決定力の育成につながる内容を含むことが大切である。

進路学習のワークシートや進路相談カードには、保護者のアドバイスや意見を記入する欄を設け、単元学習終了後や進路相談時に記入できるようにすることが大切である。ワークシートや進路相談カード(生徒用)に保護者の欄を設けることによって、以下のような効果が挙げられる。

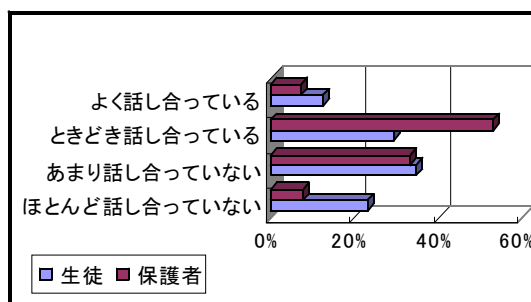
- ・学習内容や子供の思いを保護者が把握することができる。
- ・学校での学習内容や学習状況について家庭で話し合う機会をもつことができる。
- ・ワークシートに書かれた子供の感想や意見、自己評価から進路に対する思いや考え方を保護者が把握することができる。
- ・継続することで、進路に対する子供の意識の変容を保護者がつかむことができる。

【資料4】保護者との話し合いの内容

		(%)	
	話し合いの内容	生徒	保護者
1	進路希望・実現の可能性	54	66
2	勉強に対する意欲・態度	42	58
3	進路の悩み・不安	33	30
4	上級学校の進路情報	30	38
5	よさを生かした進路選択	28	44
6	保護者の経験談	20	41
7	社会人としての心構え	15	37
8	社会問題	8	22
9	学校の出来事	6	5
10	将来の職業など	5	3

(10項目中当てはまるものを選ぶ)

【資料5】5年後・10年後の進路の話し合い



また、子供の学習の成果や自己評価に対して、保護者が意見や助言を書くことにより、保護者自身が進路についての考えをまとめたり、振り返ったりすることができる。

以上のように、進路相談カードなどに保護者の欄を設けることにより、保護者の子供理解を深めることができる。そして、それに基づいて、保護者と子供が、将来の生き方について早くから話し合うことができる。

(3) 学級活動、道徳、体験活動の有機的な関連の図り方

(1) イ(イ)で述べたように、進路指導を更に充実させていくためには、学級活動、道徳、体験活動の有機的な関連を図ることが大切である。

ア 学級活動、道徳、体験活動の指導の在り方

学級活動、道徳、体験活動の有機的な関連を図るためには、それぞれの学習の目的を明確にし、どのように関連付けることが効果的であるかを考えることが大切である。資料6の例1は、学級活動で単元全体の事前指導を行い「課題を見付け、目標をもつ」、体験活動によって「価値に気付く」、そして、道徳で更に「価値を深め、自分の考えをつくる」という有機的な関連を図ることで、資料2に示した「主体的に進路を選択する能力・態度」が育つ過程になっている。このように三領域を関連付けることによって、それぞれの学習の効果が相乗的に高まる。また、常に三領域を関連付けるのではなく、内容によっては二領域の関連も考えられる。

【資料6】有機的な関連を図った指導の在り方
指導の在り方

例	
1	学級活動：課題を見付け、目標をもつ。 体験活動：価値に気付く。 道徳：価値を深め、自分の考えをつくる。
例	
2	道徳：価値に気付く。 体験活動：価値を広げる。 学級活動：価値を深め、自分の考えをつくる。
例	
3	体験活動：自分の考えに気付く。 道徳：価値を広げ、深める。 学級活動：自分の考えをつくる。

注)『鹿児島県笠利町立赤木名中学校研究紀要』を参考に筆者が作成

イ 学級活動、道徳、体験活動の有機的な関連を図ったユニット構想図

主体的に進路を選択する能力・態度を育成するために、学級活動、道徳、体験活動の有機的な関連を図り、3年間を通して自己理解力、意思決定力を身に付けられるように構想を立てることが大切である。

3年間を見通して、いつ、どのような題材で、どのようなねらいや内容で行うのかを系統的、構造的にまとめた図がユニット構想図である。(資料7)

ユニット構想図の各ステージは、ねらいとする力を身に付けるためにどのくらいの期間が必要であるかを考えて、学年によって区切るのではなく、生徒の実態に合わせて変えるようにする。

第1ステージは、基礎を身に付ける段階とし、自己理解力を育てるために、興味・関心、性格、自己の特性などについて知ることを重視する。アンケート調査から、自分の能力や適性を生かした職業、仕事を希望する生徒が多いことから、自己理解力を

育てる学習は生徒の必要としている学習であるともいえる。

第2ステージは、身に付けた自己理解力・意思決定力を使う練習をする場とする。
自己理解力と意思決定力は互いに作用し合って、主体的に進路を選択する能力・態度

【資料7】 3年間のユニット構想図

ステージ	テーマ	学年	単元名・指導の在り方	ねらい	自己理解力 意思決定力	
基礎を身に付ける	自己理解力を深める	1年	将来の夢や希望をもとう。 ・将来の夢 講話 「国際理解と奉仕活動」 向上心 理想の実現	・自分の夢やあこがれを言葉で表し、自己表現することにより、現在の自分と将来の自分を結び付けて考えるようにする。	・自分は何をしたいのか、何に興味があるのかなど自分の夢やあこがれを自己表現する。	
			学1→学裁1→道2	自分を知ろう I ・自己を知る ・進路学習 地域の人の話 勤労の尊さ	・自分自身の個性を知り、その個性を日常生活や将来の職業選択に生かしていこうとする態度を養う。	・自分の長所や短所を知る。
			学2→体1→道1	自分を知ろう II ・自己を知る 中学校卒業後の進路 向上心 個性の伸長 強い意志	・自分の夢、あこがれの実現のためには様々なコースがあり、自分に合ったコースを選ぶことができることを理解し、将来に向けて進路計画の必要性を知る。	・自分の個性や特徴を知る。
		学1→学裁1→道2	将来の生き方と学習の意義を考えよう。 ・強い意志 親の願い 2年生になって 学習の仕方	・2年生として、生活の様子を振り返り、目標をしっかりとつことにより、自分の特性や能力を生かして学校生活を意欲的に取り組んでいこうとする。	・周りの人の思いを知る。(他人を尊重する気持ちをもつ) ・学ぶ意義を知る。	
身に付けた力を使う練習をする	自己理解力・意思決定力を生かす	2年	将来の生き方と職業の意義を考えよう。 ・特性を生かした進路 ・職業とは何か ・いろいろな職業 職業人の話 を聞こう 職業体験をしよう 勤労・社会奉仕	・職業の世界について、進路情報を理解し、職業と自分とのかかわりを考えたり、社会とのつながりを考えたりすることにより、将来、社会人としての生活に結び付けて考えられるようにする。	・職業と自分とを結び付けて考えるようにする。	
			学2・学裁1→体4→道1	学ぶための制度と機会を知ろう。 ・先輩たちが行く学校調査 ・卒業生の伝言、話 向上心	・学ぶ制度と機会について学習することにより、自分の進路先の視野を拡大させ、将来の進路について関心を高める。	・学ぶ意味を自分と結び付けて考える。
		3年	学1・学裁1→体1→道1	自分の適性と能力を生かした進路を考えよう。 ・適性を知る ・進路選択の条件 ・進路の生活設計 ・進路先の調査 一日体験入学 理想の実現 事業所訪問	・自らの意思と責任において進路先を決定できるように、自分についてのまとめをする。 ・希望する上級学校、事業所を調べ、進路計画を吟味し、一日体験入学や事業所訪問を有意義なものにする。	・自分の適性を知り、その上で、進路と結び付けて考える。
			学3・学裁1→体→道1	進路選択に向けて自分を見つめよう ・個性の伸長 ・不安と悩み	・悩みや不安を級友の手を借りながら解決し、自分だけが悩みや不安を抱えているのではないことに気づき、もう一度自分を見つめ直す。	・自分の悩みと向き合い、何を大切にしたいかを考える。
実践する	主体的に進路を選択する	道1→学1	卒業後の生き方を考えよう。 ・理想の実現 卒業後の心構え 理想の実現 強い意志	・自分で決めた新しい生活に進んでいく心構えをつくり、将来の目標や夢の実現に向けて、卒業後の生き方を考える。	・自分の将来の生き方を考える。	
		道1→学2→道2				

注) 群馬県教育センター『平成13年度 研究紀要』を参考に筆者が作成

が高まる。そして、進路や職業についての学習と関連させ、自分の能力や適性について理解を深めながら、将来の進路について自分の考えをもつようにする。

第3ステージは、日常生活で実践することを重視する。主体的に選択した進路を実現するように自分の能力や適性について深く考え、それらを伸ばすために、今後の生活の中で実践していくようにする。

ウ ユニット構想図に基づいた単元指導計画

学級活動、道徳、体験活動の有機的な関連を意識し、指導過程に活かすために、ユニット構想図に基づいて単元指導計画を作成することが大切である。(資料8)

さらに、単元指導計画を進めていくために、1時間ごとの単元授業案を作成し、「①目標・見通しをもつ②手だてを考え実践する③振り返る」のサイクルを進め、生徒が自分の個性を理解し、主体的に進路を選択できるようにする必要がある。

そして、それを効果的に進めるためには、ワークシートを用意し、活動の目的が明確になるような工夫をすることが大切である。また、このワークシートは、学習活動の中で用いるだけでなく、生徒の思いを記録した資料として保存し、進路指導が継続して進められるようにファイルにとじ込むようにする。

(4) 進路相談システムの構築…「いつでも、だれでも、だれとでも」

主体的に進路を選択する能力・態度を育成するためには、(1)イ(ウ)で述べたように、進路相談を通して、進路に関する不安や悩みを解消し、個に対応した指導・援助をしていく必要がある。

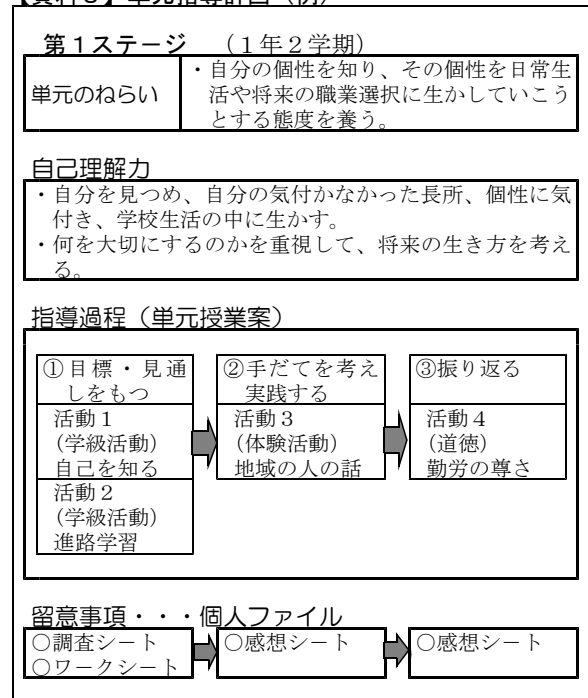
ア 進路相談の必要性

進路相談は、生徒一人一人が将来の生活に適応し、自己実現をより確実に達成できるように、問題解決能力並びに自己指導能力の発達を支援するための活動である。具体的には、進路への関心を高め、自己理解や自己受容を促し、進路選択の能力を伸長する活動である。

また、進路相談を通して、当面の問題解決に当たるだけでなく、学級活動、道徳、体験活動の関連を図る中で育ててきた自己理解力、意思決定力を伸ばし、支えていくことができる。

アンケート調査から、将来の職業や仕事を選択する基準に、自分の能力や適性、自

【資料8】単元指導計画(例)



注)「資料7 ユニット構想図」の中の1年2学期を基に筆者が作成

分の興味や好みに合っていることを挙げる生徒が多いことが分かる。(資料9)

また、卒業生は中学校時代に指導してほしかったこととして、自分の個性や適性の理解、進路選択の考え方や方法を挙げている。

これに対して、現在の中学校の進路指導は、生徒が進路に関する悩みを自分自身で解決し、生涯にわたってよりよい自己実現を果たすことを促すという本来の目的を果たせていないのが現状である。そのため、中学校での進路指導が、学校選びのための学習になっていると指摘されることが多い。

実際に教師が学級で進路指導を行う際に利用する生徒理解のための資料として、テストの結果や学習成績、進路希望調査などが重視されている。

(資料10) このことは、進路学習が進学指導に偏っていることを示す。一方、教師は進路指導で重視したいこととして、生き方にかかわる進路学習の充実を挙げていることから、教師は、生き方を考える進路指導への転換を望んでいることがうかがえる。(資料11)

しかし、これまでの進路の学習では、一般的な進路の学習や情報の提供、表面的な体験が重視され、生徒が望んでいる個別な課題に対応した指導・援助は十分に行われていない。そこで進路相談を充実させ、生徒の思いに対応した指導が必要になる。

進路に関するアンケートの保護者からの回答では、「子供の進路について中学校の先生と相談したことがある」と答えた保護者は37%にとどまっている。1年生から保護者と担任との面接の機会を設け、保護者との相談を行っているにもかかわらず、「相談したことがある」と答えた保護者が少ないのは、教師と保護者の意識に違いがあるためと考えられる。保護者は、具体的な進路についての話を望んでいるため、早い時期の相談は重視していないと思われる。それは、保護者が中学校の教師に進路について最も相談したいこととして、合格可能な高校などの進学先の選択、子供の学習意欲や態度の向上についてなど、進学や学習にかかわることを挙げていることからう

【資料9】 アンケート調査

将来、職業や仕事を選択する基準 (生徒) (%)		
1	自分の能力や適性が生かせること	54
2	自分の興味や好みに合っていること	46
3	失業のおそれがないこと	20
4	高い収入が得られること	19
5	社会や人のために貢献すること	14
6	自分の自由が多く得られること	8
7	社会的な地位や名声が得られること	4

(重視することを二つ選択)

中学校時代に指導してほしかったこと (卒業生)		
1	自分の個性や適性の理解	51
2	進路選択の考え方や方法	36
3	希望する高校の教育内容や特色	29
4	将来の生き方や人生設計	24

(10項目中重視したいことを選ぶ)

【資料10】 進路指導における生徒理解のための資料

(教師) (%)		
1	定期テストなど日常の学習の成績	52
2	日常の学習における意欲や態度	43
3	進路希望調査の回答	38
4	公的テストの結果	33
5	進路相談の記録	24
6	諸活動への参加状況	19
7	適性・興味などに関する検査・調査	14
8	生徒の進路意識に関する調査	10
9	進路学習の記録や成果	10

(当てはまるものを三つまで選ぶ)

【資料11】 進路指導で重要と思われる事柄

(教師) (%)		
1	生き方にかかわる進路学習の充実	67
2	進路指導計画の立案、実施	43
3	進路にかかわる情報の収集と活用	38
4	進路指導に対する保護者の理解	33
5	進路にかかわる体験活動の実施	24
6	社会人や保護者の講話	24
7	進路相談の充実	19

(当てはまるものを三つまで選ぶ)

かがえる。(資料12) さらに、教師との進路相談が、3年生になってから多くなること、また、相談内容も3年生になってからが、具体化してくることと関係があると思われる。保護者の進路に対する意識を変えるためにも、進学指導に偏らない指導が求められる。

その一つの方策として、生徒との進路相談を充実させるとともに保護者との共通理解を図る進路相談を考える必要がある。

イ 3段階の進路相談

進路相談を生徒一人一人に対応したものにするためには、個人によって必要性の度合いを考え、対応することが大切である。その必要の度合いに応じて、集団、グループ、個別での支援がある。(資料13)

進路相談における一次的サービスは、一定の期間に全員の生徒と定期相談として行う。そこでは、方向性をつかんだり、進路の課題を見付けたりするなどの、全員に共通する一般的、基本的な内容を取り上げる。

二次的サービスでは、随時相談が中心になる。課題解決の方向性が見付からない生徒に対して、声掛けの回数を増やし、個々の課題に対応した詳細な進路相談を行っていく。

アンケート調査から、生徒と保護者の進路希望が一致していると答えている割合は、生徒も保護者もほぼ同じ割合である。しかし、「よく分からない」と答えている割合は生徒が多く、生徒と保護者の意識の違いが見られる。生徒は、進路についての考え方がまとまっておらず、どのように進路を選択してよいのか悩んでいると考えられる。そのような生徒に対しては、個別の支援が必要になる。

三次的サービスでは、学校での進路相談だけでなく、学校生活、家庭生活全般を通して、ある期間継続した個別相談が必要になる。そのためには、保護者の協力が不可欠である。また、相談の内容によっては、学級担任だけでなく、進路指導主事、養護教諭、スクールカウンセラーなどに相談することが必要になる。

ウ 進路相談カードを利用した進路相談システム

進路相談を充実させるためには、いつでも、だれでも、だれとでも相談ができるシ

【資料12】保護者が最も相談したい内容

		(%)
1	合格可能な高校など進学先の選択	54
2	子供の個性とそれを生かす進路	26
3	子供の学習意欲や態度の向上	11
4	受検のための学習内容や方法	10
5	受検を控えた子供への接し方	4
6	進路希望の子供との不一致	1
7	子供に向いている職業	1
8	特にない	5

(当てはまるものを選ぶ)

【資料13】3段階の進路相談

一次的サービス

- ・すべての子供
- ・基礎能力を付ける
- ・促進的・予防的援助

(例)進路決定に関する不安を軽減する授業

二次的サービス

- ・一部の子供
- ・予防的援助

(例)進路に関する個人的な問題に対するアドバイス、相談

三次的サービス

- ・特定の子供
- ・問題状況による改善への援助

(例)進路にかかわる悩み、不安に対する相談

注) 石隈利紀著『学校心理学』を参考に筆者が作成

システムを構築することが有効である。

現在行われている進路相談は、学級担任が中心となっている。学級担任は、生徒の個性、家庭の事情、本人や保護者の進路希望などを把握しており、生徒との人間関係もできている点では最もふさわしい。しかし、時間や場の確保などに制約があり、必ずしも十分に相談が行われているとはいえない。また、相談の内容によっては、学級担任だけでなく、スクールカウンセラーや養護教諭などがかわることが有効な場合がある。

そこで、進路相談をより効果的に実施するためには、進路相談カードを利用した進路相談システムを構築することが有効である。(資料14)

進路相談カードを利用することにより、次のような教師にとっての利点が考えられる。

- ・進路相談カードを用いることにより、要点を絞った相談活動ができる。
- ・生徒が必要とする情報や資料を事前に準備することができ、きめ細かな指導ができる。
- ・準備ができることで、相談は短時間でも余裕をもって行える。

進路相談カードに記入することで、生徒は事前に自分の考えをまとめることができる。また、内容によっては、保護者と話し合いをするきっかけにもなる。このようにして相談内容を明確にしておくことで、話し合いの回数を減らしたり時間を短縮したりすることができる。それによって、必要な生徒には繰り返して進路相談を行うことができる。

また、相談者を担任以外に広げ、進路相談の機会を多くもつことは、生徒が、自己を見つめる機会を増やし、自己理解力を身に付けることにつながる。さらに、生徒が進路について見通しをもって考えるようにするためには、次回につながる課題を生徒に提示することも大切である。そこで、進路相談カードには、次回の課題を記入し、その課題を考えることにより自己理解が深められるようにする。

生徒用の進路相談カードは、相談担当者に提出し、相談終了後は、個人ファイルにとじる。相談の内容を記録し、個人ファイルに保存することで、振り返りやその後の相談活動に利用することができる。

教師用の進路相談カードを、1枚にまとめることにより、3年間を通じて一人一人の生徒の進路相談の過程を把握することができるようにする。進路相談カードは、学年が替わるたびに組み替え、クラスごとのファイルにしてまとめ、学級担任が利用し

【資料14】進路相談カード

進路相談カード (生徒用)				
()年 ()組 ()番 ()				
月日	相談者	相談したいこと	話し合いの内容 (自分の感想) (次回の課題)	保護者から
進路相談カード (教師用)				
1年	()組	()番	名前 ()	
2年	()組	()番	名前 ()	
3年	()組	()番	名前 ()	
年	月日	相談内容	相談の結果	担当者
連絡カード (教師用)				
いつ	どこで	だれが	気付いたこと 相談内容	
記入者 ()				

注) 仙崎武/渡辺三枝子編集『ガイダンス・カウンセリングで学校を変える』を参考に筆者が作成

やすいようにする。これにより、担任が替わってもそれまでの指導を踏まえた指導ができる。また、生徒の変化や緊急の課題に対応するためには、随時相談やチャンス相談を行う必要がある。そのためには、日常生活の中で、気付いたことをその都度簡単にメモしておき、支援を必要とする生徒に対して、昼休みや放課後の時間など短い時間を利用し、相談を行っていくことが大切である。

連絡カードに、短い文章で書き留めていたものを、一人一人の生徒に分類し、1枚の表にまとめたり、カードを蓄積したりすることにより、生徒の日常の生活の様子を把握することができる。このカードは、担任だけでなく、教科担任や養護教諭などにも記入してもらうことで、様々な場面での生徒の様子を知ることができる。(資料14)

このように、進路相談を継続的に行うことにより、生徒は自分を見つめて自己理解を深めたり、自分で決断することにより意思決定力を高めたりするなど、主体的に進路を選択する能力・態度を身に付けていく。進路相談のねらいを達成するためには日常の生徒とのかかわりを大切にし、進路相談カードを利用して進路相談を継続していくことが大切である。そのためには、進路相談を充実させ、いつでも、だれでも、だれとでも相談できるシステムを構築することが有効である。

5 研究のまとめ

(1) 明らかになった内容

- ・主体的に進路を選択する能力・態度を育成するためには、学級活動、道徳、体験活動の有機的な関連を図ることが必要である。そのためには目標を明確にし、ユニット構想図に基づいて、進路指導を計画的に進めることが必要である。
- ・進路相談では、進路相談カードを活用し、担任を中心として、一人一人の生徒のニーズに対応した進路相談を推進することが必要である。
- ・自己理解力、意思決定力を育成し、主体的に進路を選択していくためには、3年間を通じた進路指導の個人ファイルを用いることが有効であると考えられる。そのためには、個人ファイルの形式を統一することが必要である。さらに、これは保護者との共通理解を図るためにも有効である。

(2) 今後の課題

- ・単元授業では自己理解の場を多く設け、自己理解を促す内容を工夫する。
- ・生徒が主体的に進路を選択できたかを評価するための手段・方法を工夫する。
- ・保護者の子供理解を一層深めるために、個人ファイルの活用方法を更に工夫する。

注

- 1) 自己理解力とは、ここでは「様々な体験の中で、自分を振り返ることにより、興味・関心、長所短所、得意分野など自分の特性を理解する力」と考える。
- 2) 意思決定力とは、ここでは「毎日の生活の中で、様々な機会に自分の考えを明確にし、自分で判断・実践し、決定する力」と考える。